

研究計画書を書く能力の育成

毛利 貴美

科目名：大学・大学院進学に向けての文章表現：志望理由書と研究計画書

レベル：初級1・2 / 中級3・4・5 / 上級6・**7・8**

履修者数：34名

1. 授業のねらい

本科目は、日本の大学院進学時に必要となる志望理由書や研究計画書の文章表現を学ぶと同時に、以下のような研究活動に対応できるアカデミック・スキルの習得を目標としている。

- ①大学・大学院で求められる情報収集力を身に付け、専門領域についての知識を深める。
- ②データや資料を用いて具体的な論拠を示し、論理的に他者に伝える能力を身に付ける。
- ③日本の大学・大学院の研究活動で求められる批判的思考や問題解決能力を身に付ける。
- ④研究計画書や志望理由書を書く過程で、自分自身の研究の目的や課題と向き合い、研究活動に必要な思考力を身に付ける。
- ⑤自律的に文章を作成するための自己評価のスキルやストラテジーを身に付ける。

本科目では履修者の9割以上が実際に大学院への進学を希望している。そのため、この授業の最終目標は一つの完璧な研究計画書を完成させることではなく、大学院入学後に研究テーマが変わっても、新たな研究計画書を自分自身で書き上げられる能力を身に付けることである。よって、「文章表現能力」だけでなく、上記①～⑤にあるような「自律学習能力」「研究力」の能力育成も意識したプロセスをシラバスデザインに組み込んでいる。授業ではマルチメディア教室において学習者自らが必要な情報を探し、取捨選択しながら自分自身の研究計画書を書き上げていく実践的な活動が中心となっている。

2. 授業の概要

2-1. 授業の構成と進め方

まず、「研究計画書」の書き方に関する授業（全12回）では、第1～7回までを「基本編」とし、研究計画書を書くための基礎的能力の育成を目ざす。各授業の前半約45分は研究計画書でよく使用される書き言葉の表現を学び、様々なタスクを通して文章表現能力を習得していく。後半約45分では、自分の研究に必要な情報を収集して整理していく活動や、研究計画書のサンプルを利用して特徴的な文章表現や構造に気付かせる活動を行う。例えば、「研究の背景・動機」「研究の目的」「研究の意義」「研究の方法」のそれぞれの部分が文章全体に占める割合や、接続詞や表現の特徴、参考文献の数と記述される箇所等をグループでまとめ、発表を行う。また、自分の研究に関わる参考文献のリストを作成し、内容について要約する課題を課すなど、多くの研究計画書や論文を読む活動を通して学術的な文章の表現技術や構成について知り、自分の研究計画書にどう取り入れるか意識

化する機会を設けている。その後の第8～12回は「実践編」となり、実際に自分自身の研究計画書を書き進め、教師やTA、クラスメイトの意見を参考に客観的な視点から推敲を繰り返し、完成させる。第13～15回では、完成した研究計画書の内容も含めた「志望理由書」を書くという進め方になっている。

2-2. 「実践編」における文章推敲のための活動

学習者が自分自身の研究計画書を書く「実践編」では、最初から完成度の高い研究計画書が書けていることはごく僅かで、語彙や文法に多くの誤用が見られるが、フィードバック時には過剰な誤用訂正を行わず、構成や文章の展開、論理的な記述が不十分な箇所を中心にマークし「なぜそう思うのか」という問いを設けている。その後、学習者自身で推敲を重ねて内容面を充実させた後で、改めて語彙や文法を吟味し、内容を文章化していくプロセスを経る。これは、学習者が「自分の力で研究計画書を書き上げた」という達成感を持ち、大学院入学後も自信を持って自律的に研究を進められることが重要だと考えるからである。

さらに、より客観的な視点を得られるように、同じ研究領域の学習者同士のグループを作り、内容に関する意見交換やお互いの研究計画書を読んでコメントし合うピア活動を複数回設けている。専門的な内容にも気づきを得られる協働活動を組み込むことで、より内容面での完成度を高めていき、また、ゼミなどのディスカッションを想定した場面を設けることにより、研究のレディネスを得られる機会となることを期待している。

3. 学習者の反応

本科目のレビューシートには「研究計画書特有の文章表現だけでなく、研究とはどのようなものかがわかった」「自分がどんな研究がやりたいのか、そのために研究をどうやって進めていくのかを深く何度も考えることで具体的な計画書を書くことができた」という内容のコメントが多く見られる。また、每学期終了後、大学院に合格することができたとの報告が複数あることから、大学院で認められるレベルのアカデミック・スキルが自分自身の力で習得できた学習者もいるのではないかと思われる。

4. 今後の課題

本科目では、学習者が自分自身で志望理由書や研究計画書が書けるようになることを目指しているが、高度な文章表現能力を身に付けても、実際には研究の根幹となる「内容」の部分の不十分であれば、最終目標の達成は難しい。そのため、ベースとなる“研究の構想を立てる段階”が重要となるが、学習者の専門は多岐にわたり、日本語のクラスでどこまで対応できるかが本科目開講以来の課題となっている。今後は、同じ研究領域の学生同士のピア活動やフィードバックの機会を増やし、より多く、より深く自分の研究について向き合うことのできる場面を設けていきたい。

(もうり たかみ, 早稲田大学日本語教育研究センター)